

主 題：交渉の余地なし5

聖書箇所：申命記 10章12-16節

私たちはこれまで申命記10章からみことばを見て来ました。今日はしばらく学んできたこの事柄を終えたいと思っていますが、伝えたいことが非常に多くあります。けれども、時間は限られていますから何を言うのかしっかり考えなければいけません。でも、この箇所を見始めてからしばらく時間が経っていますから、簡単であっても、どうしても復習をしなければなりません。初めに、その復習をしてから今日の箇所に進めて行きたいと思います。

申命記10章12-16節にはこのように記されています。

「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、：13 あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである。：14 見よ。天ともろもろの天の天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、主のものである。：15 主は、ただあなたの先祖たちを恋慕って、彼らを愛された。そのため彼らの後の子孫、あなたがたを、すべての国々の民のうちから選ばれた。今日あるとおりである。：16 あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もううなじのこわい者であってはならない。」

私たちが最初にこの箇所を見たときに、ごいっしょに考えたことは、神はいったい私たちに何を求めておられるのかということでした。神の私たちへの要求は何なのか？そのことを考えるに当たって、先ず最初に、神の要求を正しく理解するためのカギは何かを考えました。そこで二つのことを皆さんにお伝えしました。

◎神の要求を正しく理解するためのカギ

1) 私たちが神と個人的な関係をもっていること

確かに、イスラエルの民は神の契約を受けたアブラハムの子孫であったのですが、モーセが言うのは、あなたが単にアブラハムの子孫であるからこの要求が分かるわけではない、神との個人的な関係をもっていなければいけないということでした。そのことがこのことばによって表わされています。1節「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。」、「あなたの神」でなければいけなかったのです。そこには神と個人的な関係が結ばれていなければいけなかったのです。そのことが私たちが神が求めていることをしっかり理解し、それを実践して行くに当たって、絶対に必要なことでした。別の言い方をすれば、もし、皆さんが神との個人的な関係をもっていなければ、皆さんがこの神の要求を全うして生きることはできないということです。それゆえに、モーセは訴えました。「あなたの神」だ、そういう関係をもたなければいけないと。そして、もう一つ、

2) これらの要求は交渉する余地のないものである

「求めておられること」、そこで使われていることばはまさにそのようなものです。それゆえに、神が私たちにこれをしなさいと言われる場合、私たちはそれに対して言い訳をして「すみません、それはできません、これはできるけれどあれはできません」などと言うことはできないのです。神が命じるなら、神の民である者たちはそれを実践しなければいけないのです。

これらのことをしっかり理解した上で、私たちは神が私たちに求めていることを真剣に考えなければいけないのです。そして、私たちはその内容を見て来たのです。神が私たちに求めていること、それは単純明快なものでした。その要求には五つの事柄が含まれています。モーセは私たちに聖書の中にある6468の命令の中から、それらを凝縮して、私たちが主の前に何を為して行かなければいけないのか、そのことを五つの非常に分かりやすいことばでまとめてくれたのです。

☆神が私たちに求めておられること

1. 神を恐れること

唯一真の神は非常に偉大ですばらしい方であるゆえに、その方は恐れられ、その方は敬われなければならないのです。この神は王の中の王であり、ありとあらゆるものをその偉大な力と圧倒的な知恵をもって治めておられる方です。この神は完全に聖い方であり、その神の前に立つすべてのうちに健全な恐れを生み出すのです。皆さん憶えておられますか？このとき、旧約聖書、新約聖書を通して神の前に立った人物のことを見ました。イザヤにしてもエゼキエルにしてもヨハネにしても、みな、その主の栄光の御前に立ったときに、彼らが唯一できたことは恐れひれ伏すことだけでした。私たちが神がどのような方であるかを正しく理解したとき、そこには神の聖さ、神の偉大さ、神のすばらしさのゆえに、恐れが生まれて来るのです。畏怖の念です。そして、そのような方を私たちは神としているゆえに、私た

ちはへりくだりのうちに神の御前に従って行く決心をして行くのです。私たちは神を軽く捉えることはできません。私たちが神がそこにおられるということに気付いているなら、私たちはその神の前であって恐れつつ生きて行かなければいけないのです。そして、神は皆さんに「わたしを恐れなさい」と、そのように要求しておられるのです。

2. 神のすべての道に歩むこと

これは神を恐れる内側の思い、心の状態から出て来る外面的な実際の歩み方のことです。神を正しく神として認め、健全な恐れをもっているゆえに、その人が歩む人生の生き方は神が求めるものへと変わって行くのです。なぜなら、神はそこにおられてそちらに行ってはいけなと明確に表わしているからです。神のみこころに沿って私は生きて行きたいと願うようになり、その歩みをして行くのです。新約聖書もこのような歩みを何度もクリスチャンに求めています。私たちは神の召しにふさわしい歩みをしっかり生きて行かなければいけないのです。私たちの人生は神がいかによい方であるのかという、その属性を反映させて、この世の光として歩んで行く者でなければいけないのです。もし、私たちが神を神として認めているなら、もし、私たちが神は主であると言うなら、私は神の民であると皆さんが告白するなら、皆さんの人生、皆さんの生き方は今までのものと違うはずで、この世の人たちと違うはずで、皆さんは聖い正しい完全な神のその似姿を反映させて生きて行こうとするはずで、皆さんの生涯は聖さ、真実、義、そして、愛というしるしがはっきり見えているものであるはずで、神は私たちに神を恐れなさい、その神が示す道を歩みなさいと要求されます。

3. 神を愛すること

この要求は五つの要求の中の頂点となるものです。それゆえに、イエスは律法の中で最も大切なものは何かと質問されたときに「主を愛すること」と答えられたのです。この愛は単なる感情的な愛ではありませんでした。これは「私は神を愛し続ける」というその決意、献身に基づくものでした。この愛は私自身の自由を捨てて、私は神に喜ばれる生き方をして行く、神を愛する者にふさわしい生き方をして行くというその選択でした。神は私たちに心のすべてを通して、まったく制限のない愛情を神に注ぐことを求めておられるのです。神との間に他に何も入ることのできない、そのような愛が求められているのです。憶えておられますか？このときに私たちはルツがどのようにナオミを愛したのかを見ました。モアブに帰ることができたにもかかわらず、それをしないで彼女はナオミを愛しナオミに自分の人生をささげたのです。献身的にナオミの言うことを聞き、彼女の最善のために仕えて生き続けたのです。それが神が私たちに求める愛です。私にはあなた以外に大切なものは何にもありませんという、制限のない、神だけを愛する愛が求められているのです。

4. 神に仕えること 一神を礼拝すること一

これは先の三つから当然出て来る行為です。神を恐れ、神の道を歩み、神を愛するならそこには神に仕えるという生き方が現われて来て当然なのです。偉大な神を神として認め、その神が求める道を歩み一神が求めておられることは「わたしの栄光を現わしなさい」でした一、そして、神を愛するなら喜んで神を称えるために生きて行こうとするはずで、神の民、そのように自らを呼ぶ者たちは、神に仕えること以上に大切なことはない、そのように宣言するでしょう。そして、神は「わたしに仕えなさい」と私たちに要求しているのです。神の民は「私は神に仕え、神を礼拝すること以上にしたいことはありません」と言います。本当にこの要求をまっとうして生きて行こうとする人、そのように生きている人たちは「なぜ、私はもっと早く救われなかったのだろう、もっと早く救われていたら、私の人生を他のものに仕える無駄な生涯を送ることをしないで、もっと長い間神を礼拝し、神に仕えて生きることができたのに」とそのように言うでしょう。それが神が要求する仕え方だからです。それゆえに、神に仕えたいと願う、この要求をまっとうして生きようとする人は、常に神に仕えたくてうずうずしています。常に神を礼拝したくて落ち着いていられないのです。神は皆さんがそのように仕える者、礼拝する者になることを要求しておられるのです。

5. 神に従うこと

神が私たちに要求することは従順であることでした。ここで言われていることは、一つ一つの命令に対して、私たちが確かにそれをまっとうして行くことです。神が私たちに求めていることは、神が私たちに「しなさい」と言われることを私たちが確かに行なって生きる人生です。なぜ、これが必要なのでしょうか？なぜなら、そこに私たちが神の代表者としてどのようにこの地上での生涯をまっとうするかの秘訣があるからです。神がこのように生きなさいと言われた生き方を確かに生きて行くなら、私たちは神が求めるような人物になって行きます。そのようにして私たちはこの地上において「世の光」となるのです。神を愛すると言いつつその命令を守らない者は、神を知らない者です。そして、その命令は重荷とはならないとヨハネは言いました。神を愛しているからです。

このようにして神を崇め、神を愛し、神に仕えて生きて行く姿こそが神が要求するものだったのです。

これらの事柄が主がモーセを通してイスラエルの民に要求したことでした。確かに、聖書全体の中にはたくさんの命令があります。それら全部を凝縮して五つにまとめてくださいというと、モーセはこの五つを上げたのです。これらの要求は決して私たちが交渉することができるものではないのです。私たちが自分自身を神の民であると呼ぶなら、私たちは神を愛すると告白するなら、皆さんはこれらのことをまっとうして生きて行くその歩みをして行かなければいけないのです。それがモーセがこのイスラエルの民に対して、そして、私たちにに対して教えていることです。決して難しいことではありません。理解することが困難なことではありません。モーセは神が要求していることを非常に明確に示してくれたのです。私たちがよく理解することができるようなことばを使って、単純明快にこれらのことを話してくれたのです。

けれども、モーセはここですべての話を終えるわけではありません。この後、モーセは私たちにいくつかの非常に大切なことを教えてくれています。今日、皆さんとともに考えて行きたいことはまさにこのことです。モーセはまず、次の2節でそのことを教えています。どうしてこのような要求をされるのが当然であるのか、そのことを私たちに理解させようとするのです。そして、最後に、モーセはどのようにしてその要求を満たして生きて行くのかを教えているのです。モーセは二つの根幹的な理由を上げています。そして、その理由に基づいて、私たちが何をすることによってこの要求をまっとうして生きて行くことができるようになるのかを教えてくれています。今朝、そのことをごいっしょに見て行きます。願わくは、私も皆さんもこれから学んで行くことをしっかり理解して、これらの五つの神の要求をまっとうして生きることができるようになりたいと思うのです。

14節の初めに「**見よ。**」ということばがあります。このことばは、このモーセのことばを聞いている人たちが注目することができるように使われています。「注意しなさい、これから言うことをしっかり覚えておきなさい」と、そのことばをもってモーセは私たちに非常に大切な事柄をこれから伝えようとするのです。

☆神はなぜ、このような要求を私たちにされるのか 14-15節

なぜ、私たちは神の要求を全うしなければいけないのでしょうか？神はどうしてこの要求をされるのでしょうか？その理由は、

1. 神が偉大な神だから

モーセが最初に私たちに告げることは、神がこの世界すべての完全な支配権をもっているということです。別の言い方をすれば、モーセがここで言うことは、神はすべてのものが神のものであるゆえに、何を求めても構わないはずだということです。自分のものに対して何かを要求することは間違っていないです。モーセはこのように告げています。14節「**見よ。天ともろもろの天の天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、主のものである。**」と。この14節で私たちが理解することはその完全さです。天のすべて、地のすべて、天にあるありとあらゆるもの、また、地にあるありとあらゆるもの、それらすべては圧倒的な形で神のものであると言います。簡単に言うなら、神のものでないものは何もないということです。神の所有物でないものはいっさい存在しないのです。聖書はそのことを一貫して私たちに教えています。たとえば、ネヘミヤ9：6ではこのようなことばが使われています。「**ただ、あなただけが主です。あなたは天と、天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、そのすべてを生かしておられます。**」、神だけが所有者なのです。神だけが私たちにいのちを与えることができます。神がいなければ私たちは存在することもなかったし、今この存在を継続することもあり得ないと言います。詩篇24：1-2「**地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。：2 まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。**」、私たちはよく覚えておかなければいけません。神があらゆるものを所有しておられます。神だけが完全な所有者なのです。エレミヤ10：12-13にはこのように書かれています。「**主は、御力をもって地を造り、知恵をもって世界を堅く建て、英知をもって天を張られた。：13 主が声を出すと、水のざわめきが天に起こる。主は地の果てから雲を上らせ、雨のためにいなずまを造り、その倉から風を出される。**」、神がすべてを支配しておられる、神は所有者だから…。神はそれゆえにこのように言われました。「**天はわたしの王座、地はわたしの足台。**…」(イザヤ66：1)。この神、イスラエルの民に対して、また、私たちにに対して五つの要求をされている方はいったいどのような方か、あらゆるものを所有しておられる方です。それゆえに、この方は主権者であられ王であられるお方です。自分のものであるゆえに自分のものに命じるとそれらはそれをするべきなのです。だから、イエスが嵐の中で舟でお休みになっておられるときに、嵐に命じると嵐は止まりました。なぜでしょう？主権者であり所有者である方がだめと言うなら、それは止まるのです。この方は全世界の王です。この偉大な方の力強い御手から逃れるものは何一つありませんし、この偉大な方のすばらしい知恵から隠れることができるものは何一つないのです。このようにすべてのものを支配し所有しておられるその方は、それゆえに、ご自身の民に対して何をすべきなのかを要求して当然なのです。

このことを理解するのに特別な知識は必要ありません。私たちは毎日の生活の中でこれと同じことをします。皆さん職場で仕事をされます。また、学校に行く、家で生活されるでしょう。そのために私たちは自分の上にいる人たちに対してその要求に従います。従うべきだと分かっています。私たちがだれかが自分の上に立つ存在であるということを認めるなら、そこには必ず、特定の責任が生まれます。その人の言うことを聞かなければいけないという責任です。それゆえに、私たちはその人たちに「あなたは私にそのようなことを要求する権利はありません」ということはできないのです。神が私たちにこれら五つのことをしなさいと言われたとき、私たちは神にそのようなことを要求するなんてとんでもないことです、私はそれを拒絶しますなどということは絶対にできないのだと言うのです。なぜなら、この方は全世界の支配者だからです。ヨブはそれを試みました。どうして、このように苦しみ続けなければいけないのかと言うヨブに対して、その最後に、神はヨブの前に現われて、あなたはわたしがだれか分かっているかと言われました。そこで神がヨブに対してされたことは、いかに主が偉大な創造主であり、いかに主がすべてのものを造り保っておられるのかを示されたのです。そのとき、ヨブは灰をかぶって「神さま、私が間違っていました」ということしかできませんでした。

神が求めること、神が為すことに対して、私たちはそれに逆らうことはできません。逆らうべきではありません。なぜなら、神は偉大な所有者だからです。それと同じように、私たちが神がどのような方であるのかを確かに覚えるなら、私たちはなぜ、神の要求を全うしなければいけないのか、それをしないことがいかに間違っているのかが分かるはずです。モーセは神が偉大な方であるから、あなたはこれをしなければいけないと言うのです。

2. 神が偉大なすばらしい対応をしてくださったから

15節にはこのように記されています。「**主は、ただあなたの先祖たちを恋い慕って、彼ら愛された。そのため彼らの後の子孫、あなたがたを、すべての国々の民のうちから選ばれた。今日あるとおりのである。**」と。確かに、神がいかに偉大な方であるのかということを知ることは、私たちがどうしてこの要求をまっとうして生きなければいけないかということの動機づけとなります。しっかり、その理由が示されるから、確かにその通りだと納得して、確かにその方向へと進んで行くことを助けるでしょう。でも、もしかすると、それ以上に、この15節で記されていることは私たちがますます熱心に神の要求を満たして生きて行きたいと思わせるものだろうと、私は思います。ここでモーセが語っていることは、信じられないくらい驚くべきことです。モーセはここで、二つの動詞を並列に並べることによって、神がいかにすばらしいことを私たちにしてくださったのかということをお教えています。その二つは「愛する」と「選ぶ」ということばです。これらが並べられることによって、モーセはここで神の選択を私たちに明確にしています。先ほども話したように、聖書はこの「愛」が単なる感情的なものではないことをお教えています。むしろ、この「愛」はどのような行動をして行くのかということに明確に現われる選択だと言います。

「選ぶ」、だから私はするとお言います。申命記の中でこの二つのことばが繰り返して同じ節の中に続けて表われることは何度もあります。ときに、「選ぶ、愛する」というように順番が逆になったりします。特に、この申命記の中には、「愛する」ことは「選ぶ」ことであり、「選ぶ」ことは「愛する」ことなのです。そのような関係をもっているのです。同じ表現が申命記4：37に記されています。「**主は、あなたの先祖たちを愛して、その後の子孫を選んでおられたので、主ご自身が大いなる力をもって、あなたをエジプトから連れ出された。**」、ここで言われていることは、このことこそがまさに、エジプトから出て来たその根拠になっているということです。神はアブラハム、イサク、ヤコブに対して示された約束を守るゆえに、今、あなた方はモアブの平原にこうして集まることができているのだと言うのです。

神は、イスラエルの先祖たちを愛しておられました。アブラハムを愛し、イサクを愛しヤコブを愛しておられたのです。そして、彼らと契約を結ばれました。10：15に戻って、「**主は、ただあなたの先祖たちを恋い慕って、彼ら愛された。**」とあります。神はアブラハムを愛したのです。そして、「**そのため彼らの後の子孫**」、つまり、あなた方を選んだと言うのです。神は先祖たちを愛しあなたを選んだと。それがここでモーセが語る驚くべき事実なのです。何よりも驚くべきこと、信じられないくらいのも事実なのです。神がアブラハムに対して愛を注がれ契約を結ばれた創世記12章以降、申命記10章までの間に、どのような歴史があったのかご存じですか？特に、この申命記10章に至るまでの、過去40年間を振り返ってみてください。何がありましたか？イスラエルの民を特徴付けることばがあるとすれば、それは「反抗、または、反逆」以外の何ものでもありません。そして、その最も顕著な現われを、私たちはカデシュ・バルネアでの出来事に見ることができるのです。イスラエルの民はシナイ山から出て来て、今まさに約束の地を征服しようと、その地の南側に来ていました。そして、12人の斥候を送るのです。彼らは偵察して帰って来ました。ヨシュアとカレブの二人は「さあ、行って攻め取ろう、すばらしい土地だ、神が助けてくださるから私たちはそこに行くべきだ」と言いました。残りの10人は「神は私たちが滅ぼすためにここに連れて来たのだ、今から、別のリーダーを立てて急いでエジプトに

戻ろう」と言います。その報告を聞いて民はどうしたでしょう？10人の話を聞いたのです。申命記9：23-24「**主があなたがたをカデシュ・バルネアから送り出されるとき、「上って行って、わたしがあなたがたに与えている地を占領せよ。」と言われたが、あなたがたは、あなたがたの神、主の命令に逆らい、主を信ぜず、その御声にも聞き従わなかった。：24 私があなたがたを知った日から、あなたがたはいつも、主にそむき逆らってきた。」**、信じられない出来事です。神はそれまでどれほど偉大な力をもってイスラエルの民を守って来られたことでしょうか。偉大な力をもってエジプトの大群を滅ぼされました。シナイ山の上でも偉大な力を見せました。そのような反抗、不誠実、そのリストを上げるならきりがありません。神にこれほどまでに反抗的で、これほどまでに不忠実で不誠実なそのイスラエルの民に「わたしはあなたの先祖たちを愛し、あなたを選んだ」と言われるのです。神ご自身が結ばれた契約に対して、神は決して揺るぐことがない誠実さをもって接しておられたのです。たとえ、神の民と呼ばれる人たちが継続的に何度も繰り返して信仰を現わさなかったとしても、真実さをもって接することがなかったとしても、神はこの民に「わたしはあなたを選ぶ」と言い続けたのです。彼らが受けるべきだったのはさばきでした。滅びでした。けれども、神はご自身の約束に忠実で誠実であられたゆえに、彼らを滅ぼすことがなく、今、この時でさえも、「わたしはあなたを選ぶ」と言ってくださっているのです。

さらに、不思議なことがあります。「**あなたがたを、…選ばれた。**」ということばの間に「**すべての国々の民のうちから**」ということばがあります。実は、この15節には文頭に日本語の聖書には訳されていないことばが出て来ます。「しかし、けれども」ということばです。このことばを入れて考えるなら、モーセはこのように言っているのです。「神はこの世界のありとあらゆるものを支配しておられる所有者です。それなのに、ありとあらゆる国民の中から何とあなたのような者を選んだのだ」と。なぜ、神は「**すべての国々の民のうちから**」この民を選ばれたのでしょうか？正直、私はこの「神の愛、選択」を皆さんにうまく説明することができません。なぜなら、選ばれるべきでないからです。そして、そのことはまったく同じように、私たちに適用することができます。皆さん、ご自分の人生を振り返ってみてください。救われる前の人生を、また、救われた後の今までの人生を…。神はあなたを救われるべきだと思いますか？皆さんは神に私は救われて当然だと言えますか？それとも、神は私たちがイスラエルの民のように、神を知っていると一言いながら、継続して神に対して従順でなく、不従順に不誠実に不真実に生きていた私たちに対しても、変わることもなくあわれみを注ぎ、愛を注ぎ、私たちが神のものとして立てようとしてくださっていると、そのことに気付きますか？どちらでしょう？神がいったいどのようなことをしてくださったのか、そのことを考えたなら、神が私たちに要求されても当然だと思いませんか？不思議な愛と選択をもって私たちに接してくださっている神に対して、私たちは「ぜひ、あなたの生かしてください、あなたのために生きるようにしてください」と言うはずです。私たちは神に交渉することができない要求をします。しかし、よく考えるなら、交渉できないのではなく、交渉したくないのです。神が求められることをぜひやらせてくださいと思うからです。モーセは言います。「あなたが神の要求を満たして生きて行かなければいけないのは、神がどのような方であるのか、また、神があなたに何をしてくださったのかが分かったなら、当然のことだと思うようになるから」と。

☆私たちはどのように神の要求を満たして行けるのか？

最後に、モーセは私たちに「なぜ」だけでなく、「どのように」ということを教えています。その方法が16節に記されています。「**あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もううなじのこわい者であってはならない。**」とモーセは言います。原文を見るとこの節の文頭にも「それゆえに、だから」と訳すことができることばが加えられています。つまり、神は偉大な方であり、これほどまでにすばらしいことをあなたに為してくださったのだから、それゆえに、あなたは「**心の包皮を切り捨てなさい**」と言うのです。「**包皮を切り捨てる**」、すなわち、割礼ですが、ここでモーセが言っている「割礼」は明らかに肉体的な割礼のことではありません。「**心の包皮**」と言っているからです。けれども、肉体的な割礼と関連があるゆえにここでこのことばが使われているのです。イスラエルの民はアブラハムの契約に基づいて、生まれてきた男の子は必ず八日目にその性器の包皮を切り取ることが命じられています。それによって、その人物が確かにアブラハムの契約を受ける者であることを証明するためです。この行為は両親が確かに、神がアブラハムに約束したその約束、また、神がそれに伴って求めている要求を私たちは守り従いますという決心の表われだったのです。つまり、この肉体的な割礼というのは「私は神の要求に従います」ということの具体的な形としての表われだったのです。けれども、聖書は明らかに私たちに肉体的な割礼があるかないかによって、その人物の神に対する信仰が決まるのではないということを教えています。肉体的な割礼は霊的な状態と一切関わりのないものでした。割礼を受けていても霊的に死んでいた者はたくさんいたのです。それゆえに、モーセがこの箇所を通してイスラエルの民に、また、私たちに訴えることは、肉体的な割礼を受けなさいということではなく、霊的な割礼を受けなさいということです。心を覆っているその包皮を取り除きなさい、神に対して私は従わない、私は神の要求に適合して生きて

行こうとしないという、その包皮を切り取りなさいということです。そのことは次のことばを見るとはっきり分かります。「もううなじのこわい者であってはならない。」と言います。この二つは繋がっています。心の包皮を切り捨てるのです。なぜなら、切り捨てなければ「うなじのこわい者」であるからです。

「うなじのこわい者」とは？皆さん分かりますか？一番簡単な例は、子どもを歯医者に連れて行って、親は診てもらったことが最善だと思い、子どもの手を引っ張って歯医者の方へ進もうとしますが、子どもは固まってしまっていて力の限り親が引っ張ろうとする方向へ進まないようにと頑張ります。それがこの「うなじのこわい者」です。これは農耕に使われていた馬や牛などが、一生懸命手綱を引いても首を硬くして進ませようとする方向と違う方向へ行こうとする、そのようなときに使われることばです。つまり、神は「あなたは心の包皮を取り除きなさい、そうして、わたしが進みなさいという方向からからだをこわばらせてそこに行きたくないということがないように」と言うのです。イスラエルの民に対して最初にこのことばが使われるのは出32：9です。モーセがシナイ山にいたとき、ふもとでは何が起こっていたでしょう？人々はアロンに金を与えて金の子牛を造りました。そのとき神は山の上で「主はまた、モーセに仰せられた。「わたしはこの民を見た。これは、実にうなじのこわい民だ。」と言われたのです。それだけではありません。それからもずっと続いています。申命記9章でモーセはこのときのことを話しています。あなたがたは「うなじのこわい民だ」と言っています。そして、9：23-24にはこのようなことばが記されています。「主があなたがたをカデシュ・バルネアから送り出されるとき、「上って行って、わたしがあなたがたに与えている地を占領せよ。」と言われたが、あなたがたは、あなたがたの神、主の命令に逆らい、主を信ぜず、その御声にも聞き従わなかった。：24 私があなたがたを知った日から、あなたがたはいつも、主にそむき逆らってきた。」と、これがイスラエルの民だったのです。そして、この民に「これ以上神に背き逆らい続けてはならない」と言います。心にあるその罪深さを切り捨てて神が求めることにしっかり従順に生きて行かなければいけないと。それがモーセが人々に求めたことです。

最後に、では、どのようにして「心の包皮を切り捨てる」のですか？抽象的なことを言われても分かりませんと皆さん言われるかもしれません。そのことが申命記30章に記されています。

申命記30：1-15

「私があなたの前に置いた祝福とのろい、これらすべてのことが、あなたに臨み、あなたの神、主があなたをそこへ追い散らしたすべての国々の中で、あなたがこれらのことを心に留め、：2 あなたの神、主に立ち返り、きょう、私があなたに命じるとおりに、あなたも、あなたの子どもたちも、心を尽くし、精神を尽くして御声に聞き従うなら、：3 あなたの神、主は、あなたを捕われの身から帰らせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主がそこへ散らしたすべての国々の民の中から、あなたを再び、集める。：4 たとい、あなたが、天の果てに追いやられていても、あなたの神、主は、そこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻す。：5 あなたの神、主は、あなたの先祖たちが所有していた地にあなたを連れて行き、あなたはそれを所有する。主は、あなたを榮えさせ、あなたの先祖たちよりもその数を多くされる。：6 あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。：7 あなたの神、主は、あなたを迫害したあなたの敵や、あなたの仇に、これらすべてののろいを下される。：8 あなたは、再び、主の御声に聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を、行なうようになる。：9 あなたの神、主は、あなたのすべての手のわざや、あなたの身から生まれる者や、家畜の産むもの、地の産物を豊かに与えて、あなたを榮えさせよう。まことに、主は、あなたの先祖たちを喜ばれたように、再び、あなたを榮えさせて喜ばれる。：10 これは、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従い、このみおしえの書にしるされている主の命令とおきてとを守り、心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神、主に立ち返るからである。：11 まことに、私が、きょう、あなたに命じるこの命令は、あなたにとってむずかしすぎるものではなく、遠くかけ離れたものでもない。：12 これは天にあるのではないから、「だれが、私たちのために天に上り、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」と言わなくてもよい。：13 また、これは海のかなたにあるのではないから、「だれが、私たちのために海のかなたに渡り、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」と言わなくてもよい。：14 まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあつて、あなたはこれを行なうことができる。：15 見よ。私は、確かにきょう、あなたの前にいのちと幸い、死とわざわいを置く。」

6節を見てください。「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。」とありますが、だれが「心を包む皮を切り捨て」たのでしょうか？神です。このわざは神のわざです。では、どうして神は私たちに「心の包皮を切り捨てなさい」と言われるのでしょうか？10節を見てください。「これは、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従い、このみおしえの書にしるされている主の命令とおきてとを守り、心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神、主に立ち返るからである。」と、つまり、私たちが神の前に立ってこのように言います。「神さま、私はあなたが求めることに対して、徹底的に献身的に揺るぐことなく従う決意をもって生きて行きます。私はあなたに立ち返ります。」と、その決心が確かであるとき、その選択を私たちがして行くとき、神が私たちの心の包皮を切り捨ててくださるのです。皆さんの心の包皮は切

られていますか？神を信じると言いながら、今だに「うなじのこわい者」ではありませんか？皆さんはもしかすると、神の要求を守ることは私にはなかなかできないのと言い訳をしていませんか？神は言われます。その言い訳を止めなさい、もう継続的に「うなじのこわい者」であることを止めなさいと。今、「心の包皮を切り捨てなさい」、今、決意しなさい、そうすれば、わたしがあなたの包皮を切るからと。「うなじのこわい者」であることを止めましょう。そして、主に喜ばれる、主の要求に従って行く、そのような民となることができるように、神に期待して生きて行きましょう。「まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、…」（14節）。